



「文明崩壊」
一滅亡と存続の命運を分けるもの—
ジャレド・ダイヤモンド 著
楡井浩一 訳
草思社文庫, 2012年12月
上巻 553頁, ISBN 978-4-7942-1939-8
下巻 547頁, ISBN 978-4-7942-1940-4
上・下巻とも1200円 (本体価格)

本書の英文表題は“COLLAPSE” —How Societies Choose to Fail or Succeed—である。著者 Jared Diamond は進化生物学・生物地理学を専門とするカリフォルニア大学ロサンゼルス校教授である。本書は2005年に Brockman 社から出版され、日本語訳が草思社から出版され、さらに文庫版として出版された。

現在、様々な地球環境問題（気候温暖化を含む）、災害、資源問題との関連において人類社会の持続可能性 (sustainability) が懸念されている。これらの問題は相互に関連し、自然科学・工学的技術だけではなく、政治・経済・社会慣習・文化などに広く関わっている。

本書は下記の構成で書かれ、社会の持続可能性を広い観点から議論している；

プロローグ 二つの農場の物語

第1部 現代のモンタナ

第1章 モンタナの天空の下

第2部 過去の社会

第2章 イースターに黄昏が訪れるとき

第3章 最後に生き残った人々（ピトケアン島とヘンダーソン島）

第4章 古の人々（アナサジ族とその隣人たち）

第5章 マヤの崩壊

第6章 ヴァイキングの序曲と遁走曲

第7章 ノルウェー領グリーンランドの開花

第8章 ノルウェー領グリーンランドの終焉

第9章 存続への二本の道筋

第3部 現代の社会

第10章 アフリカの人口危機（ルワンダの大量虐殺）

第11章 一つの島、ふたつの国民、ふたつの歴史

(ドミニカ共和国とハイチ)

第12章 揺れ動く巨人、中国

第13章 搾取されるオーストラリア

第4部 将来に向けて

第14章 社会が破滅的な決断を下すのはなぜか？

第15章 大企業と環境（異なる条件、異なる結末）

第16章 世界は一つの干拓地

追記 アンコールの興亡

以下、各部、各章の要点を紹介する。

●プロローグは総括の章である。モンタナとグリーンランドの農場の環境比較に始まり、過去に消滅した数々の社会を概観している。著者は、社会の消失を招いたのは、「住民の意図しない環境資源の破壊」だと述べている。森林乱伐・植生破壊、土壌劣化、水管理破綻、鳥獣、魚介類乱獲、外来種による在来種駆逐、人口増加、一人当たりの環境侵害量の増加の8項目を破壊の素因として挙げ、さらに近代の問題として、気候変動（人為的温暖化）、有害物質、エネルギー不足、全地球的光合成量の限界の4項目を加えている。

また、社会の崩壊に関与する下記の5項目の要因を指摘している。それらは、環境破壊（前記した各項目）、気候変動、敵対集団、友好集団（交易）、社会の対応能力である。実際の崩壊はこれらの要因が重なり合って生じたと分析している。

●第1部では、現在のモンタナ州の環境問題を議論している。モンタナ州の面積は ~38万 km²（日本と同程度）で人口は ~100万人である。この地域でも、環境問題（水質悪化・水不足、鉱害、生物多様性の低下、有害外来種の侵入、気候変動等）が深刻化している。この背景的事情として、一次産業（農・牧業、林業、鉱業）の衰退が関係している。林業では皆伐方式が森林を荒廃させ、鉱業の廃棄物処理の不備が水質劣化をもたらしている。相対的に生産性の低い個人農牧業が衰退し集約的農牧業に移行したが、その過剰な営利追求が土壌劣化をもたらしている。第1次産業の衰退にかわり、観光、レジャー、保養（別荘地など）産業が重要となり、局地的な人口流入・増加をもたらした。

これらの問題について地域の人々はそれぞれの立場から異なる見解を持ち共通する対応策を集約することは困難であり、世界の環境問題解決に共通する困難性が浮かび上がっている。このように、モンタナも世界の環境問題の縮図（モデル）である。

●第2部と付記は過去の社会の盛衰についてのケーススタディである。第2-8章では太平洋の孤島、アメリカ大陸の乾燥地域、大西洋高緯度地帯の事例が、付記ではインドシナ半島の事例が選ばれている。各章では、廃棄堆積物の放射性同位体の分析、同系言語分化解析、壁画・絵文字、口承伝説、石器の原産地分析、樹木年輪分析、沈殿物の花粉分析・金属イオン分析、野ネズミの廃棄残存物の分析、木造建造物の年輪分析、食糧廃棄堆積物の分析、歯の摩耗度、遺体の栄養状態の分析等により、社会の生産・消費の歴史を推測している。各ケースの環境的背景（気候、植生、土壌など）および社会的背景（交易、敵対集団など）は異なるが、自然再生能力を超える消費で環境資源のストックを消尽して衰退に向かったと推論している。

第9章では、衰退した社会と持続できた社会を対比して、資源ストックの消尽を避ける生活スタイルを選択した社会もあれば、それに失敗した社会もあったと述べている。

●第3部は、現在の社会の環境問題を論じている。

第10章ではアフリカの人口危機の事例としてルワンダをとりあげている。人口密度の高いこの国では植民地時代に始まる民族対立が激化して大量虐殺が引き起こされた。背景には食糧生産のための森林伐採、沼地の干拓、休耕期間の短縮、多毛作のための自然環境破壊、コーヒー・紅茶価格の下落、貧富格差の増大があり、さらに旱魃が影響し、住民の長期的な絶望状態が作用したと述べている。

第11章ではイスパニョーラ島について論じている。嘗ての100万人の島民はスペインの侵略と病原菌の侵入により激減し、以後移民の国となり、西部はフランスの植民地をへてハイチとして独立したが政情は不安定で、農耕のため国土の森林は殆ど消滅し環境危機に直面している。島の東部はドミニカ共和国となったが政情は不安定で独裁政権が長く続いた。ある独裁政権は森林保護をはかり、そのためかなりの森林が残されているが、環境問題は今後の課題となっている。

第12章では、「急成長中の巨大経済国」の中国の環境問題を論じている。急激な産業の発展に伴う、大気質・水質・土壌の汚染、水不足、土壌劣化、森林破壊、生物種多様性の喪失が進行している。強力な一党独裁の政治体制を持つこの国が、どのようにして環境問題を克服するのかを注目している。

第13章はオーストラリアの環境問題が紹介される。乾燥気候帯に位置するこの大陸では、水と肥沃な土壌

に恵まれた土地は僅かである。多くの外来種を導入した農牧業は自然の再生量を上回る収奪で環境資源のストックを消耗している。西欧的な民主主義政治体制と高度の文化水準を持つこの国が、どのようにして問題を解決できるか注目される。

●第4部は持続に対する社会の対処を論じている。

第14章では、なぜ社会が自滅に至る環境破壊を食い止められなかったのかを分析している。その理由として；「予知できなかった」、「進行している環境破壊を感知（認識）できなかった」、「対策を取らなかった（取れなかった）」、「対策を試みたが失敗した」の4項目を挙げ、その背景事情として「緩慢な環境変化（気候変動など）の進行が見過される」、「利害関係のため社会的合意が得にくい」、「問題の直視を恐れる心理」、「価値観・生活の転換の困難」等を挙げている。

「環境破壊に対する警告」については多くの反論がある。それらは；「環境と経済発展の調和」、「科学技術による解決」、「代替資源の開発」、「環境破壊の過大宣伝（狼少年）とする見解」、「遠い未来の心配ごと」、「無限の経済成長の夢想」などであるが、いずれも誤った論拠であると批判している。

第15章では、大企業の「株主・経営者の短期的の収益至上主義」が環境破壊につながると指摘する一方、「賢明な法的規制や市民団体の圧力」が、大企業の行動を是正した成功例も挙げている。

第16章ではオランダの干拓地の事例を挙げている。国土が水没すればすべての国民に被害が及ぶため環境保護意識が共有されている。ある地域の崩壊の影響は全世界に波及する。地球から脱出できない人類は、環境保護意識を共有し価値観を変えなければ生存の持続を維持できないと述べている。

本書の記述の多くは引用文献に依っているが、執筆から10年が過ぎ内容の一部は改訂を要するであろう。著者の解釈や推論の誤りもあるかも知れない。異なる見解もありうる。また持続についての具体的提言はない。このような問題があるけれども、環境問題と持続可能性を広い観点から議論している点において意義のある書物である。地球環境に関わる様々な課題について多くの研究者が取り組んでおられるが、個々の問題の解明がどのように社会に役立ち、どうすれば活用されるかについても深く考えることが望まれる。このためにも、本書の一読は有益である。

(無所属 二宮洸三)